[illegible]

かさりはあきぬかぶきのそぢがき

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

劇場珍報　第百三拾三號　京都四條南側の芝居新狂言筋書

短夜夢朝日手枕

編輯の草稿　拾壹冊

場割（大　序）京都室町御所の場○同室町家別館の場（二段目）北野天滿宮社内の場○寺の内よし久館の場○加茂堤の場（三段目）近江の國粟津廣瀬甚兵衛内の場○同奥の間玉里身賣の場（四幕目）伏見原田屋店先の場○京都。松原河原勝助殺しの場（五幕目）大阪龜井橋に忠僕松助身投の場○同尻無川網船の場（六幕目）大阪福島の裏長家。丑松卯の助隣住居の場（七幕目）大坂新町九軒夜櫻の場○同高島屋二階の場○同高島屋門口の場（八幕目）佐渡の國吉久配所の場（九幕目）大阪新町扇屋。玉菊部屋の場○同扇屋裏手の場○今宮村淸三隱家乃場（十幕目）城川宇治の里庵室の場（大詰）同扇の芝敵討の場」

○夜の部新狂言「新種園朝顏」（序幕）王子飛泉の場○海老屋坐敷の場○裝束榎木螢塚の場（二幕目）新川や内の場○同放れ坐敷朝顏娘居間の場（三幕目）柳橋五調内の場（四幕目）新川や別莊の場（大詰）船橋驛宿やの場○役割は早川淸三。忠僕松助。島人幸藏實は松助甥妓お梅の四役は（福助）松助女房お梅船大工卯の助。相模屋次郎三郎○都五調は（壽三郎）大坂屋伊兵衛。丑松の女房お夏のちに曳船宿り木新川屋音次郎は（珊瑚郎）玉里姬のちに契情玉菊。島人三吉。娘お玄ゆんは（嚴笑）雁婆アお虎○料理人喜助。たし元お村は（芝の助）下僕勝助○若イ者七助。番頭慶六は（津多七）杉本長治ト按摩菊の市は（芝五郎）電の五郎兵衛ト新川屋妻德右衛門は（玉猿）侍女おきさ後に尼智妙。奥お惠は（若菊）富山隼人。藝者の歌八（歌雀）方江川は（金作）新造玉琴箱廻し佐七は（八百三郎）其外岡助。猿升。珊の助。三吉。鶴助。門多○仲三郎。三ッ猿。市次郎。紅錄。壽の助。などの役もあれど略す夫から坂上彦九郎。扇屋三郎兵衛。植木屋繁藏鳶の者。實五郎の四役は（市十郎）松助の娘お松ト幇間高は（政次郎）吉久朝臣。船大工丑松。國司小六。相模屋太郎兵衛の四役は（雀右衛門）さて新狂言（園の朝顏）の筋書は第百三拾四號にて近日賣出し

（大　序）京都室町御所の場。舞臺の造物ハ一面の筋塀此内に見越の松都て室町家築地外乃体。爰に足輕四人六尺棒を携へ立掛り居る此見得時の鐘鶏笛にて幕明ト△何と各位非常ぬ珍事ではムらぬか×されば御殿の内ならイザ知らず人も通はぬ御寶藏ゟの出火○夜巡りの者どもの見認てより早速消止てはムれど●何か紛失物があるとの事にて只今御詮議最中」トそんな事を云て皆々上手へは入る跡橋掛りか（仲間源八）黑裝束忍びの拵へにて四方窺ひ穴ゟ出て來り呼子笛を吹是にて塀の内ゟ植木屋（繁藏）矢張黑裝束にて松の樹に取附半身出て下を窺ふ（繁）源八か（源）繁藏か（繁）コ○ナリヤ（源）然して首尾ハ（繁）氣遣ひするな萬間と首尾能かの一品を」サ手を貸てくれ（源）合點だト是にて繁藏ハ寶物の釜の箱を出して下す夫ゟ兩人捨せりふ有て（繁）長治樣と打合し白銀の釜に黃金百兩奪ひ取たる此罪を吉久朝臣に負す狂言彼乃吉久さへ罪に落せバ長治樣の御無念も晴るといふもの僕も表向ハ植木屋だが内證ハ盜賊が商賣それも他人の依賴なら更に受ねど當時山名の御家來とハ御威勢強い長治樣。戀なればとて貧乏公家に恥をかゝされ其儘に指を啣へても居られめへと僕が勸めた此仕事も平常出入乃旦那なり御世話に預る奉公と思ッて働たも植木屋だけ木へ登らしたら猿も同格そこで此松の木から萬摩と首尾よく忍び込御寶藏の片隅を燒た紛れに錠をねじ切盜出し爲此釜を直に今から吉久の邸の内へ忍入り庭の植込へ隱て置バ何れ遁れぬ放火の盜賊是がスラリと行時ハ約束通り褒美の大金トいふ此時以前の足輕出て（足）怪しき曲者（兩人）何を小癪なト双方へ投返すのか木頭に道具替り（室町家別館の体）爰に（杉本長治）（富山隼人）麻上下黑白の諸士八人と俱に居ならび吉久朝臣の噂をする處へ（藤原の吉久）冠り束帶

の拵へにて笏を持出て来り形容の詞を濟して(吉)出火の義ニ付麿に詮義乃筋ありとハ如何成事にひぞや(隼人)イヤ其詳細御存知あらざれバ御不審も去事ながら昨夜の出火ハ怪火にて御寶藏へ忍びし曲者め跡を隱さん其爲ニ放火なせし其疑ひ貴卿ニ罹りし五災難隼人近頃お氣の毒ニぞんず(吉)コヘ思ひ寄ぬ其仰せ曲者忍び入しとなれバ何ろ紛失の品にてぞ(敵役)いろにぞ將軍家御秘藏の一品白銀の釜ならびに黄金百両共紛失致してムる(吉)エヽ(敵役)夫を貴卿へ疑ふハ跡ニ殘し是成る書狀此手跡覺がムるか(吉)眞ニコリヤ是麿が手跡に寸分違はぬ大師樣(長)おとば希被成る吉久殿貴卿が書た手跡だ物(吉)コハ誰人かと思へば執權山名殿の御家來長治殿是なる書狀を麿が認めし物なりとハ罪ある者に罪を負し給ふよな(長)默り召れ吉久卿大師流の書をなせ者ハ公家武家の其中にて貴卿より外ないとの事さすれバ昨夜の盜賊ハ貴卿の所爲に相違なき手跡その慥な證據でござる(吉)然バ是成る一書ハ誰が手ニ入て吉久を盜賊なアと仰せらるゝぞ(敵役)それだ夜前出火の後御寶藏を改めし處それ成る杉本長治殿が早くも見認て拾し書狀なんと覺がムらふがや(吉)イヤ吉久かつて存知申さぬ(皆々)何といはるゝ(吉)總じてかやふな惡謀をなす者ハ大事の洩んを厭ふがゆゑ證據と成べきかやふな書狀ハ燒棄るが當然いかに狼狽たる曲者とて御寶藏へ忘るゝとハ餘りの麁忽察する所吉久ニ意恨を含む者あッて麿が手跡の僞筆を拵へ罪に取て落さん結構(長)ヤ(吉)ヘテ淺はかなき惡計ぢやなアト長治ニ思入有て云ト(隼)何樣拙者も左ハ存じたれど證據とあるに止を得ず一應お尋ね申せしあれど○僞筆を以て貴卿をバ罪に落さん結構なるべしト立役の諸士皆々吉久を厭ふ(敵役)ア、否谷位假染ならぬ寶の盜賊僞筆ばかりで事ハ濟まい吟味の上ニぞ吟味させんと先刻吉久殿の舘へ多人數を調べに遣ハしぬれバやがて歸るでござろふ哩(長)いかさま夫が論ゟ證據ト詞渡る此時花道方(ヤ上升)ト釜の箱を持走り出「仰せに隨ひ吉久卿出門の跡へ駈入り諸所吟味致せし處廣庭の樹木の蔭ニかやうな箱のあるべき筈なく合點ゆかじと早速持歸り升てムり升るト云吉久悔り(吉)ナニ麿が舘の庭中ニそれなる箱がありしとな(隼)何ニもせよ(皆々)是へ〳〵(侍士)はットト件の箱を指上れば敵役の諸士直ニ箱の紐を解き蓋を明て態と驚悔(敵)誠ニ是ぞ疑ひもなき白銀の作釜(吉)合點の行ぬ何してそれが○ヤヽヽ(長)なんと各位下拙が鑑定如何でござる其品出し上からハ最早ぞふあらがふとぞ言譯くらき昨夜の盜賊猶此上ニ御詮義あらバ金子の白狀致すでござろう(敵役)いろに吉久卿御身が書流の僞筆を以て意趣ある者の惡謀とハ何を證據ニ仰せらるゝぞ○是なる釜ハ義政公茶器第一の御秘藏物。是でも貴卿の所爲でハムらぬか(吉)サア夫ハ(隼)申開きの條もムらむ及ずながら我輩ども將軍家の御前よしなに御執なしの仕つらん言開きの筋がござるか(吉)サア夫ハ(敵)言譯なくバ放火の盜賊貴卿の所爲ニ相違あるまい(吉)サア夫ハ(敵)言譯ムるか「サア「サア「サア〳〵〳〵〳〵(長)何と言譯の筋がムろう天罰のがれぬ證據の密書拙者が見た目に相違ムるまいがト屹度いふ吉久當惑の思入有てうつむく是を隼人が氣乃毒に思ひ(隼)指當ッたる吉久卿の御難義此上ハ主人細川勝元へ申聞へ得と吟味の仕つきバ吉久卿にハ拙者が邸へ(長)アイヤ其義ハ相成舛舞(隼)とハ又なせに(長)然バの事サ中旬の十日ハ貴殿の御主人細川公の御係りなれど月末の十日ハ拙者が主人山名宗全が係りにムれバ事件落着致す迄拙者が主人へ吉久殿を(隼)イヤ夫ハ相成ませぬ今日より山名殿の

御係にもせよ事ありしハ昨夜の事然れば主人勝元どの係り中ゆゑ一應攝政家へ御届ケ申せし上此方ゟ御引渡申すでムれバ夫迄の御差配ハ御無用〳〵(長)ム、然らば拙者ハ館へ歸り―ト種々捨臺詞あッて敵役四人下手へはいる跡に隼人殘り思入有て吉久の傍へ行き懇切に氣を慰め人に意恨を受べき覺ハムらぬウト問ふ吉久其厚志を悦び「外に意恨を受べき義ハムらねど彼の杉本長治。麿が娘玉里をバ妻にくきよと強ての所望されども平常の品行よろしからざる者ゆゑに痛く恥ちしめて歸らしが若やそれ等乃意恨にて(隼)ム、夫にて思ひ當る事あり云々ト不審の箇條を吉久に告げる此時以前の敵役二人出て來り「只今山名公より吉久朝臣をお引渡しあるべしとの仰せにムれば「イザ御立なされト無情いふ(隼)嗚呼寔に晴天白日も風雨の災ひありと思へバ(吉)人身の禍害いかで歎き申さんや(隼)夫もやがて曇の晴る(吉)時節を相待申べし(隼)左様ムらぬ吉久卿(敵役)お立なされ(吉)ア淺猿しき身の成行ちやなアト是非なく山名の館へ拘引される此見得時の太皷にて道具替るト以前の筋塀。爰に杉本長治。植木屋繁藏仲間源八立掛り居て(繁)モシ旦那昨夜の働きハどんな物でムり升(長)イヤ其方が勸めに依て身も其意に隨ひしが萬一事を仕損じなば一大事と思ひしに首尾よく往ッて重疊〳〵(源)夫ぞ彼の玉里をバ旦那に指上なぞ斯いふ見ドめも見まいもの大方吉久めぞ後悔致して居ませふよ(長)シテ奪ひし百兩ハ(繁)懷中に此通りト出して見せるを手にとらず其儘兩人へ配與へ「拙者ハ是ゟ主人の許へ一部始終を申上げ細川の當番にならぬ先よし久めが罪の落着を(繁)成程事件のバレぬ内片を附るが跡の用心(長)まだ其方に申談ずる義もあれば(繁)ハイ又金儲けの口あれば隨分片棒助ませう(源)夫なら旦那首尾よく往た(兩人)祝ひにちよッぴり(長)「コレ」ト押へるのが木の頭(長)高うまをすな靜に致せト四方へ意を注ぎ兩人ハ閉口の思入此模様にて柏子幕

(二段目)京都北野天滿宮社内の場。

舞臺の道具ハ眞中に白木造の隨身門是に眞鍮の菱燈籠を掛け上手に藝妓の染暖簾。紅塗の提灯。新製の白粉(君が艶)の看版などを掛けたる茶店。下手ハ筋塀此前に奉納の石燈籠。空より紅葉の釣枝都て北野天滿宮隨身門の体幕明ト爰に參詣の仕出し大勢居て戯談を云乍ら東西へ引込む跡唄に成り花道ゟ前幕の杉本(長治)仲間の(源八)宿屋の主個(大坂屋伊平)出になる扨其大坂屋伊平ハ長治の仲間源八に「おせ僕が旦那の足蹴踏にぢッた其腹癒せに斯するのだト難題をいひかけられ迷惑の處へ敵役の(坂上彦九郎)が門の内ゟ出て來り(彦)イヤ源八まちやれ高の知れたる素町人へ無理咎めも大人氣なし(源)ヤさふ云貴君ハ(彦)坂上彦九郎手前でござるト深編笠をとる(長)オヽ貴殿ハ坂上テモ思ひがけない(彦)拙者に逢てハ貴殿の都合が悪うムるか(長)なんと(彦)拙者に賴んだ彼の一條貴殿忘れハそッしやるまい万一お忘なら此町人の門前で演立やふか。然らむ邪慳なる此町人拙者が許す早く立去れト伊平を退け長治に向ひ(彦)罪なき者を罪に陷して貴殿の恨を晴させたハ一体全体誰の光庇でムる皆此彦九郎の陰でムるぞ。忘もせぬ此月中旬文言ハかやう〳〵で大師樣の書狀をバ認めくれよと強ての依賴ハ戀の叶ハぬ意恨晴しに吉久朝臣を人知れず罪に取て落さん謀企コレサ何もいふ顔をしかめて手を振にも及バぬ事僞筆に妙得し某ゆゑ大師やうの書狀をば書認めて渡せしに事成就なし上ハ褒美ハ望に任すとあるゆゑ其味ひ噺を樂みに待に待ども沙汰もなく彼の吉久ハ罪しながら拙者の謝禮を其儘に打捨て置る、とハ扨も〳〵」ト長治の非を

數へ褒美の金高の定めてないのを幸ひにドウ金千両を貪り以後ハ猶更別懇にかだんをなんと誓ひ立て三人連立門の內へは入る跡へ大坂屋伊兵衞が出て右三人の惡事を小蔭で立聞をして居る筋を述べ直に門へは入る跡唄に成花道ゟ吉久朝臣の娘玉里姬廣振袖お姬樣の拵へにてかづきを冠り跡ゟ侍女（おきさ）付添出に成「父上樣の寃罪をば何卒救ひ給はるやふ日毎〳〵の步詣でも云々ト憂き事繁き世をかこつ折柄爰へ以前の長治容子を窺ひ出て來り（長）イヤ其神よりハ某が利益を與へヤをムろう（玉）ヤさいふあなたハ日外館へお越なされし（長）山名の家來杉本長治よくも此お顏を忘れもせず覺てムる　コレハ長治頼母しう思丼る哩（玉）シテ又あなたが利益を與へ給ハんとハ（長）されバ吉久朝臣にハ放火盜賊の科に依り此程よりの御糺明其吟味を致す者ハ拙者が主人の山名宗全嘗へ大罪を犯せしとて底が主人と家臣の間此長治が腹一ッで親御の難義を御助ヤすハ最易ん事。サ爰が其許への談合他人で有てハ其義もならねど其許さへ娶りなバ拙者が爲にも舅の難義その緣を以て主人へ願ひ見事父御を救ふて見んが何と此長治と夫婦に成る氣ハムらぬかコレサ玉里殿どふでござる〳〵ト玉里ムッと怒し思入有て氣を替（玉）不束な自らをばお厭もなふ其やふに仰せ下さり升る御深切お嬉しうハ存升れどいかに父樣の御難義がお救ひヤたけれどもとて自らが儘にもならず此義斗ハ御免なされて」ト取止のない返答をする處へ以前の（源八）出てお旦那其慈悲心ハ止にして未だ白狀せぬ吉久の罪を玉里姬より詮義致させッ日頃のお望もト目で知らせて玉里に繩を打かけ役所へ引くト無理に拘引去かける處へ艶立役の（早川淸三）町人若旦那の拵へにて門の內より出て來り源八を突退け玉里をかばふ是にて長治ハ愕り（長）ヤア見れバ素町人の分際にて武士なる者の家來扱バ（源）なんで汝ハ投やアがッたト痛さを堪へ起上るト（淸）何のあなた町人の私しがお武家樣の御家來をば手ごめに致してよろしい者でムりませうか御仲間でも武士の御家來第一あなたの恥でハムりませぬかト例の穴に成（淸）委細ハおれにて聞て居升た此お女中を妻に迎へバ聟舅の緣に寄り吉久樣とやらいふお方の科を助けて遣ふとの事其お情ハ聞へましたが其緣談が叶ハぬとてお可愛さふに此お方に繩を打て引ふとハチト私曲でハムりませぬか（長）ヤ（淸）町人ながら諸侯方へすこしハ出入も致す者お上向キの御詮義ハ承知した物でムり升る一應其筋へ伺うて見たうムり升をバ貴君のお住所御姓名をお聞せなされて下さりませ（長）サア夫ハ（淸）お身を大事と思し召ば此儘お濟し下さるか（長）サア夫ハ（淸）お訴へ申ませうか（長）サア夫ハ（兩人）サア〳〵〳〵（淸）お止申すハ貴君のお爲餘もお叱りハムり升まいト敵役を言懲す是にて長治ハへらず口をききながら無念を堪へ源八を制して門の內へ引込む是と引違へて侍女おきさ出て來り「是ハ〳〵いづきのお方かハ存じませねど姬君樣の御難義をバよふお救ひ下さり升たト玉里も共に厚く禮をいふ夫ゟ淸三ハ兩人へやさしく挨拶して日暮前でハあり幸ひ私しも大宮通り迄歸る者にムり升れば苦しからずバお館迄亂暴者の來ぬ內にお送り申ませうト此筋の臺詞渡り皆々花道へは入る跡へ以前の長治。彥九郎源八出に成「一ト筋繩でハゆかぬ玉里そこへ邪摩な青二才め此上ハ彥九郎殿の策略の通り學習院よりの使者と僞り彼乃玉里めを引揚る「時刻も恰好宵闇の「曇りを幸ひ「是ゟ直に「用意を調へ「シテ待合す其場所ハ「人里放れし加茂堤「成程さしづめ其時ハ齋世の宮ハ則ちお旦那「姉屋姬てハあらねども女ハ同じ公家の姬君「身

どもが筆先一ッにて罪に落せし吉久ハ「取て直さず芝居なら菅相亟の役廻り「所も恰好北野なる天満宮の社内にて「讎を執もつ拙者の思案ハ「櫻丸にハ請取憎ひが牛ハ牛づれ下郎も一ト骨「然らバ坂上「ぬからぬやうに（彦）與力の手練ハト腕を叩くのが道具替りの知らせ（彦）爰にゐられへ」ト此摸様にて道具ぶん廻すト

（寺の内藤原の吉久朝臣館乃場）造物三間の間玄關見附にさや形の襖上下屋邸塀松の釣枝都て吉久の館玄關先の体爰へ以前の玉里お沱そ清三に送られて花道ゟ歸る（玉）今日の容子をむ一應母へ申聞け何かの御禮をも申ゐーせめてお茶なとなうおきさト憂を忘れて両人が清三の深切を謝し「無理にお止も致ませねどお名前お所丈を仰しやる置て下さりませト問ども更に名をいはず（清）随分共に親御様乃冤罪の御難が晴升やふに天満宮へ御信心を遊ばせませ云々ト挨拶そこ〳〵清三は元の花道へは入る跡見送りて（玉）町家に育ちしお方にしてハお手の内の見事といひ（き）御器量なら物腰格好眞にあの御方に烏帽子装束を着せ升たら業平さんも及び升まい（玉）お名も所も仰しやらねど必定筋目の賤からざる（き）奥床しいお方でムり升るなアト爰へ吉久の（奥方江川）侍女と共に出て來り（江）かなしや我夫よし久殿に終に辨解述難く彌々賊の罪に落。佐渡が島へ流罪乃宣告を受られしといなふ。。。其知らせを松助に聞よア早ふ知らせたさにそなたの戻りを待兼て勝助を迎ひにやりしが途中で逢てせなんだか何の意恨で我夫を罪せし者かと知らねど唯跡々の身の用愼が肝要なればト夫ゟ侍女輩を遠避け（玉）以前當家に勤めたる廣瀬甚兵衛ハ今近江の國粟津の里に居るとやら道の程も遠からねば一ト先甚兵衛の方を便り又跡々ハいかやふとも夫御得心なら松助にも事の仔細を明せし上今宵の内に人知れず館をぬけて粟津の里へト母娘密に心を定め急て支度をする處へ下部の勝助はせ歸り（勝）ォ、姫君様お歸りでムりましたろ何所で道が違ひ升たやらスゴ〳〵門前へ歸ッて見れば學習院からの御使者とて姫君様を俄のお召なき〳〵それへ參り升たトいふ間程なく向ふより以前の坂上彦九郎足早に出て來り（彦）只今御家來を以て申入れしが吉久殿犯罪乃義に付娘玉里に俄に尋問ふべき仔細あれば即刻出頭致すべしとお掛りゟ過急のお召。早く同道致されよ（江）成程玉里ハ是に居升るが夜分俄のお召とハ何の仔細か合點の行ぬ（彦）イヤ夫ハ學習院へ參れば事理がわかるひは取ては役目の落度早くさッせへ（勝）アヽモシお使者様御主人ハ言譯立ぞ流罪と事が定まッたではムりませぬか（彦）ヤ（勝）サ其罪が疑はしくば御吟味中に召れる筈元より覺のない科にて流刑と罪の定まッたも皆悪人のさらした所爲それを思へば今頃にお呼出しとハ。。。ウサンな御使者」油斷とならぬト見張り居る玉里思案の思入有て（玉）母様もお案事遊ばし升るな乗物にても苦しからずば不快をおして自ら出頭仕りませう併し暫時の猶豫をと使者へも挨拶そこ〳〵に奥の一ト間へ入にける僞迎ひハ氣をいらち（彦）過急の御用に何𢭏ひまどり早く用意を致さぬか（勝）何程早くとせき立ても館におれば主人の骸そふせり〳〵と吐しない（彦）こやつ又慮外を（勝）慮外とは何が慮外だト争ふ折しも上手ゟ（六尺）姫君の御越にムり升る（彦）オヽそれ待兼た早くやれ（勝）イヤ下郎が御供をするのだ（彦）夫にも及ばぬ（江）デモ娘一人お預け申ても何とやら（彦）氣づかもーく〳〵後刻迎ひに參るがよい哩ト言捨て乗物いそがせ彦九郎迯足早く立歸る跡に勝助思入有て（勝）學習院の使者とはいへど何かそも〳〵致せし様子だふも心に呑

込ませねバ今の跡より見へ隠れに御供をしても如何ト伺ひ許を受て走りゆく江川も猶も打案じ我の召も何のお尋ね心懸りな事でもあるト此時奥より（娘の玉里）風呂敷をさげ出來り（玉）母様お案じ遊バし升るないかに過急のお尋問とて女子一人を夜中の召は必定惡人の謀略ならんと推量せしゆゑ自らが躰にもてなし乗物にて」ト鳥渡叫く（江）ム丶夫ならアノ忠義に厚き（玉）アモシ」ト押へ（玉）何事も油斷のならぬ時節ゆゑ此間に舘を立退んと彼にも落着く其先を聞せてやり升たれば先大切な系圖お位牌是をば卿の肌につけ暫時も早う粟津迄ト玉里も江川の手を曳平舞臺へおりる此時花道ゟ大阪屋の主個伊兵衛足早に出に成（伊）惡謀の跡を聴ふばつかり彼等の行衛を尋ねたのでいろふ遅ふ成たれど北野で聞た彼の事をちッとも早う奥様へそふぢや〳〵ト舞臺へ來る奥ゟ以前のおきさ書置を持こし元共に出て來り（き）チヽ誰ろと思へも三條の大坂屋どの何の御用ろ知らねども今此方も混雜最中。サアどふ云譯か知らねども子細あッて姫君様にも母君諸共お舘を御立退遊バそとて召仕の私しらへ暇を取そとある此書置（伊）エ夫なら奥様姫君にもエヽマ折角北野で聞ゐ事をバお知らせ申しに來たものを。シテ何方へお立退なされしか（侍女）夫がわかる程なれバ斯うろたへもせぬ哩なア（伊）エ殘念なト云此内柴垣のうしろゟ玉里江川の手を取抜足をして花道へゆく是をおきさが透し見て（き）ヤ慥に奥様（侍女）姫君様（伊）ナニ奥がかト提灯をさし出す此模様よろ聢早めの合方にて道具替るト（加茂堤の塲）舞臺も高二重の草土手まん中に地藏堂所々に松の大木稲村松の釣枝向ふ一面野面越しに加茂の社の遠見。都て加茂堤の摸様時乃鐘にて道具納る」〇扨豫て御高評を蒙り升た（拳會角力圖會）大本二冊は價五拾錢にて賣出しん

明治十六年五月十二日出版御届
（代價參錢五厘）
編輯兼出版人　大阪府平民　華本安次郎
東區北久寶寺町三丁目第三拾四番地

劇場珍報第百貳拾八號

中の芝居
新狂言筋書

短夜夢朝日手枕

別て御看客へ告奉つる　吉例の通り第百廿四號（一段目）の奥より大詰迄を掻摘ンで纏た筋立をバ只々當坐中而己の便用に當號へ掲げ置升したが恰かも演劇を観る格に臺詞をも明細の筋書は矢張第百廿五號及び第百廿六廿七の兩號へ掲げ置増て厶り升お望の御方御觀客は「一二冊袋入の筋書」ト仰せ下され御最寄にて御愛求の上猶「又當戯塲の御高評くださるべくはやう隅から角迄ズラリッと御願ひ奉すト又も欲張る拙者はッレ五存知の花園一一き更紗圖譜にてもお馴染のハンモト（加茂堤の塲）此塲は吉久の下僕松助が玉里姫に化れり態と玉里の駕に乗り主人を罪せし悪人等を探ッて居るとは露知らぬ玉里姫ぢやト一圖にソレ得彦九郎ト源八が恥辱を受る件そこへ大工の丑松同女房（お夏）奴の勝助杉本長治などが出て闇闘に成ド々勝助は長治に縛られるのが幕●（三　幕　目）江州粟津廣瀬甚兵衛の宅に玉里身賣の塲。爰に忍ぶ玉里は母の大病を打案じ貯金とてもあらざれば其身の代金にて母の藥禮又佐渡へ流刑になられし父の許へ松助をば慰問にやる路用にそと終に母親乃許を請け浪花新町の扇屋へ貳百両にて勤奉公その内金の五拾両に書狀を添て佐渡へゆく松助に渡し殘る金額百五拾両をば委皆母に渡す夫ゟ母孃別れの大愁嘆あッてド々玉里は駕に乗られ出てゆく跡淒イ合方に成扉婆アのお虎が玉里ゑ母江川を縊殺して右乃百五十両を奪ふ殘酷な一譚を見せ其處へ植木屋繁藏が出てお虎を威す詞よろ聢（繁）勝助と言合せ此宅へ忍ンで動靜を聴も玉里に返ッて我輩が謀られ其埋草と思ッた儕の先を越し。せしめた財布乃金額を爰で半額渡せバ承知否とぬかせば儕

も又料理ハ覺悟の入切庖丁どうだ〳〵ト詰寄て曲者同志が立廻りに成ドゝ繁藏ハお虎を斬殺して件の金を横奪の幕●（四　幕　目）伏見の舟宿原田屋店の場。扨も松助ハ佐渡へ趣く途中浪花に殘せし妻子にも永の別れに一ト目ありと逢て配所へ出立せんと伏見へ下り此舟宿へ風呂敷包を預け急用を達しに行く扨又松助の妻お梅ハ仔細あッて七年以來逢ぬ所夫の居處が幽かに知れたれバ其安否を尋んと盲目ながら娘のお松を杖にして京へ登る道すがら此舟宿にて支度の時我志らず自分乃包ト松助の包みを取違へ其中の書狀より松助は全く主人の介抱に佐渡へゆくとの始末がわかり夫婦互ひに今日此舟宿の敷居を越て居ながら行違ひに成しかどお梅は歎く爰へ松助の朋友大坂屋伊兵衛が來て種々慰める詞よろ敷ドゝ我宅へお梅お松を連歸る道具替るト京都松原川原勝助殺しの場。惡婆を殺して件乃百五拾両を奪ふたる繁藏ハ豫て曲者勝助との約束もあれど此大金ハ自分一人の德にせんと伏見の舟宿から程よく勝助を欺し終に此川原迄連出し斬殺して迯退く機會　早川清三）と云浪士に呼止られ片袖をばちぎらるゝ本文乃筋爰へ（國司小六が出て早川と暗試合み幕切●（五　幕　目）ハ大坂龜井橋の松助身投の場。忠義一圖な松助ハ玉里姫が辛苦を忍びて調へた路用乃金と書狀を入れたる包をバ伏見に於て取違へし其不行屆を悔み種々樣々に思案をしても路金ハ出來ず詮方つきて龜井橋から身投の件此道具替るト尻無川網船の場。此場ハ一端身を投た松助が二段目のおきさの舍弟卯の助ト女房お梅の實兄丑松の網船へ助け揚られ終に蘇生の幕●（六　幕　目）福島の裏長家丑松卯の助隣住居の場丑松ハ松助を助けて我家へ連歸り嘗へ荷物ハ失へども路銀さへあらば佐渡へ渡りて忠義を盡すに事は欠まじお氣遣ひなさるなト男氣にいへど當なき金の才覺大きに困ッて居る是を察して女房（お夏）が態と丑松に愛想を盡し其身ハ二度の勤めに出て五十両を調へ丑松に渡す松助は其實意を悦び件の五十両を懷中して佐渡へ出立する扨隣家の卯の助ハ其松助の爲に姉のおきさから頼れた事とハ知らず五十両の金が現在今丑松が持て居たも恩人なれど彼を殺し五十両を奪取て姉に渡さむ傍輩の命を助ける功德のみか主人の爲にもなると心得終に丑松を殺せど金を持てゐず短筒の中かと探して居る所へ京からお梅お松が松助の荷物を携へ歸ッて來て兄の横死を歎く卯の助後悔の段にて幕●（七　幕　目）新町九軒夜櫻の場同高嶋屋二階乃場にて三幕目の玉里は身を苦界の廓に沈め名を玉菊と更め世をあぢきなふ送る內圖らず二段目の早川清三に巡り逢ふト「去年京都の松原川原にて人を殺せし賊の詞に吉久朝臣を罰せし由を罵詈る夜引へく詮義と思ひし所迯足早く片袖のみちぎりし故後日の證據にもならんかと玉里の行衛を尋たとの物語其外種々の器量を試し一ッは清三の深切にほだされかゝる武士と親もまだ父を罪せし惡人をも尋ね出し再び家を引興す補佐にもと終に清三と二世の契りを結ぶのが此一ト幕の目貫也●（八　幕　目）佐渡の國吉久配所の場忠僕松助ハ佐渡に渡り主人吉久に侍き他事なく忠義を盡し居る扨前幕のお梅ハ松助を慕ひ遙る爰へ尋ねて來れど其身ハ盲目なり娘ハ當才にて別れし故父の顔を知らず松助○は妻子に名乘逢んとせしかど恩人丑松の横死は全く松助の所爲なりとの嫌疑掛り詮義の幕東坂上彦九郎態々佐渡へ來て松助を探索なすと聞及べど妻子に憂目を見せんより無情放すが身の爲と名乘あはぬを吉久が見兼て夫婦の名乘をさす眼目の一譚より京都にてお梅が聞た寃罪に據なく吉久朝臣を無罪に陷せし者は

杉本坂上又之繁藏也ト物語る是を立聞く彦九郎は悪事露顕の大事を恐れ松助の他出中へ忍び入吉久お梅の両人を殺害して立去るのが幕

●（九　幕　目）新町扇屋の場今宮村清三隠家の場扨も杉本長治は玉里の今の身の上を聞傳へ是非請出さふト掛合ふ處へ此樓の主個三郎兵衛が出て玉里の玉菊へ年季證文を戻し勤めを放れて仕舞たら身請の强談も是迄好た男があるなれば幾千代迄も添ふがよいと云ば是より早川清三が出陣の祝ひを兼て玉里と婚禮の幕

●（大　詰）宇治の里智妙庵の場菴主智妙は二段目のおきさ也此菴に玉里が隠しておると兼て知たる繁藏が僞後悔の懺悔噺女二人を欺く處へ忠義の松助立歸了悪事に荷擔の奴原は斯した手曼で手廻りましたト夫より佐渡の珍事を物語る折しも爰へ智妙の弟船大工の卯の助が出て非業に死だ丹松と松助への言訳に切腹する又玉里も繁藏を切殺す爰へ淺黄幕。直に切て落せば宇治扇の芝敵討の場いづれも肌ぬぎにて立ならび（玉）父を罪せし杉本長治（松）夫に加膽の彦九郎（清）此清三にも舅の敵（玉）妾よにも父の仇（松）下郎の爲には妻の怨みト双方が詰寄立廻り有てドヽ敵両人を切殺し（玉）恨乃刃（松）思ひ知了たか（清）出かした玉里。目出度ひ〳〵ト陣扇を開く此ならびよ御最愛打出し

太夫本　**三榮**　道頓堀芝居茶屋

拳會角力圖會

義浪吾雀両仙醒輯述　大本全二冊

「價金五拾錢前金にて御注文郵券代用不苦

右ハ打拳の獨稽古とも稱すべき書入の珍書也

版元ハ大阪三休橋筋北へ入寶寺町南へ入東側

諸藝辞本四季の花園の

美登里堂

明治十六年五月十二日出版御届（價壹錢五厘）
編輯兼出版人　大阪府平民　華本安次郎
東區北久寶寺町三丁目三十四番地

いづ方の芝居茶屋にも御坐候　道頓堀西櫓町中の芝居前　中[illegible]井嘉吉